

# JOURNAL OF FLOW INJECTION ANALYSISの編集に携わって

名古屋工業大学工学部 和田弘子

1984年6月にJournal of Flow Injection Analysis(FIA 研究会会誌)が創刊され同時にフローインジェクション分析研究会会報Vol.1,NO.1も出版された。それは38ページの薄い会誌であったが、私にとっては新しい道が開けるような神々しいものに見えた。当時の編集後記によると、"F I A"は会報、「F I A 研究会会誌」は総説、研究報告、文献情報を掲載する会誌となっていた。その後、1990年には日本分析化学会の「フローインジェクション分析研究懇談会」となり、会誌も「F I A 研究懇談会会誌」としてVOL.7,NO.1から再出発した。FIA Bibliographyは、Vol.1,NO.1から掲載された。最初は与座範政先生が担当された。現在は、編集委員やその研究室の方をお願いしているが、年々文献数も増え検索は大変な仕事になってきている。また、国内の学会情報欄は発足当時は今任先生が担当され、その後友田先生と内田先生をお願いしていたが、友田先生がお亡くなり、現在は内田先生が担当されている。以上の様に、故石橋信彦先生が創立されたF I A 研究会(現F I A 研究懇談会)は、分析化学会の一研究部門としての役割を果たしてきたことはいずれの限りである。私は、VOL.9.NO.2 からVOL.12,NO.1までの編集を担当させて頂きました。その間に、多くの方々から論文の審査制度の導入を要望されましたので、編集委員会で審査方法など細かく議論して、一応現在の審査規定を作ることができ、1994年6月発行のJ F I A から、投稿論文(Original Paper)のみ2名の審査委員による審査を開始した。審査制度を採用したことによって投稿論文が減るということもなかったが、編集委員会の負担が大きくなり、ある限られた時期だけではあるが、編集業務が非常に忙しくなった。その対策を考えなければならない時期にきている。また、外国からの投稿も増加しつつあるが、年二回の発行であるので審査等の対応が完璧ではなく、まだ検討すべきことは残っている。

JFIA を世界に受け入れられるJournalにするためには、まだまだやらなければならないことは多い。例えば、全文を英語にすることが望ましいと思っている。編集委員長の交代に際して、会員がお互いに機能的なつながりを持ち、常に情報交換が行われることが非常に重要であると思っている。